

ICTの可能性を広い視野で捉える



社会基盤・平和構築部
運輸交通・情報通信グループ
第一チーム

古川正之
FURUKAWA Masayuki

2002年、民間のICT企業に就職。2007年から2年間、青年海外協力隊(コンピューター技術)に現職参加してスリランカに派遣された。復職後はグループ会社でのベトナム支店勤務などを経て、2015年1月にJICAに就職し、現職。

ICTを通じて社会に貢献したいという思いを胸に、民間企業から国際協力の世界へと転身した古川正之さん。JICAに就職してから2年、これまでの経験を生かすべく、異なる立場や意見を尊重しながらも、自分自身で考えることを忘れずに業務に励んでいる。

民間企業と協力隊の経験を強みに

JICAに就職する前は、ICTシステム構築を行う民間企業で金融系システムエンジニアの仕事をしていました。当時、ICTは既に社会のインフラを担う存在となっており、ICTを通じて社会貢献ができる仕事をしたかと思っていました。そんなとき、会社の先輩が青年海外協力隊に参加したことを社内報で知ったのです。私も未知の世界に挑戦してみたいという純粋な興味から協力隊に応募した結果、スリランカへの派遣が決まりました。

職業訓練校のICT講師として派遣された私は、現地の同僚の講師と協力しながらプログラミングの授業などを行いました。当時はスマトラ島沖地震の後で、海外ドナーの支援によって校内にパソコン機器が配備されましたが、現地の講師たちは全く使いこなせていませんでした。他の職業訓練校も同じような状況だったため、近隣校を巻き込んで、機器の活用や修理などに関する講師向けのワークショップも開催しました。この経験は、復職後にベトナム勤務になった際に役立ちました。ベトナムでは日系進出企業などにICT機器やサービスを提供していましたが、ネズミ対策や停電対策など、開発途上国の実情を踏まえた提案を行うことができたのです。

ベトナム勤務は、転職の一つのきっかけ

にもなりました。現地では空港や港湾などJICAの支援を目にする機会があり、交通網の整備といった民間企業だけでは難しい社会的な問題に取り組みむJICAの仕事に興味を抱くようになったのです。日本とベトナムでの勤務、そして協力隊を通じてICTに関する幅広い業務に携わってきた経験を生かしたい。この先、途上国にとってもICTの発展は重要な課題になるはずだと考えた私は、JICAに入ることを決意しました。

開発援助機関として考察する力を

現在、私が所属しているチームでは、ICTに関する調査やプロジェクト監理を手掛けている。今、新たな課題として力を入れているのが、サイバーセキュリティです。ICTの普及は、サイバー攻撃への直面という新しい脅威や犯罪を生む側の側面も持っているため、政府の適切な対応が必要になります。既に多くの国で取り組みが始まっており、インドネシアでは技術協力プロジェクトを通じて、セキュリティ強化のための技術指導や啓発ビデオの作成などを支援しました。また、途上国の行政官を招いて日本で研修を行ったり、ミャンマーやベトナムでは現地調査を通じて、どのような協力ができるのかを検討したりしました。最近では、日本の内閣官房に設置されて



カンボジアの選挙改革支援として、ICTの活用を検討するための調査団に参加した

いる「内閣サイバーセキュリティセンター(NISC)」の会議に出席し、関係省庁と意見交換を行う機会も増えました。JICA職員として、途上国の現状や課題についての見解を求められるため、国際協力におけるICT支援の位置付けなどを俯瞰的に考察できるように、より専門性を磨いていく必要性を感じています。

ICTの活用は幅広い分野で進んでいます。指紋認証システムや防災での活用、電子カルテの導入など、他の分野のプロジェクトと連携する機会も多いため、事前に情報収集を行うなどしっかりと準備しなければなりません。その中で心掛けているのは、現地の関係者の意見などをただ単に鵜呑みにするのではなく、何が本当の課題であり最適な解決策であるのかを、事前情報や自分自身の経験を踏まえて考え、提案することです。

誰も取り残されない社会をつくるために、ICTが重要な役割を担うことは間違いないと思います。今後ますます支援の在り方を考えなければならぬと思っています。



東南アジアのセキュリティー関係者を対象に行われた研修を担当した古川さん(中央後ろ)。模擬演習や意見交換などを行った